

舞岡川舞台にハグロトンボの生態調査

この活動を主導する宮崎教諭は1983年に横浜市立中学の理科の教員となり、赴任先では教鞭を執るとともに、科学部における課外授業における指導も精力的に行ってきた。近年の市内の小河川の水質改善と下水道との関連性には注目していたといい、ハグロトンボの再発見がきっかけになって科学部における活動に定着した。

宮崎教諭は舞岡中学校に赴任した平成18年から舞岡川でのハグロトンボの調査に着手。有志の生徒と舞岡川沿いを2km近くをわたって目視調査を行うとともに、全生徒を巻き込んでのハグロトンボ分布調査を実施している。

科学部として活動が進化

平成26年には正式に科学部としての活動がスタート、生態調査をより深化させたという。

宮崎教諭によると、「ハグロトンボはどんな場所を好み、どれくらい移動し、何日くらい生きるのか...?といった生態を様々な方法で調べた」といい、翅に数字を記して縄張り行動をほぼ1日かけて調査し、場合によってはそれを2日続けて行うような根気のいる作業にも生徒達は取り組んだとのこと。「ハグロトンボは、元々がどこにでもいる生き物ということで実は専門家によるその詳細な生態調査データというのが少ない」(宮崎教諭)。生徒達との調査により、カワトンボ特有の縄張り行動、つまり、メスは川下から上流に移動し、最も上流側に一番強いオスが縄張りを確保していることなど、生徒が実際に見て、調べて得られた「知見」は、昆虫やトンボの研究を専門分野とする識者からも高い評価を得たという。この点について、宮崎教諭は、「この経験は、生徒達にとっても、教科書に書いてあるから信じるのではなく、自分の目で確認して信ずるという科学に対する基本的な姿勢を体得できたという点でも良かったと思っています」

と成果を強調している。

成果は対外的な評価にも

科学の手法を手のうちに入れた生徒達の活動は積極性と深みを増し、調査報告書や論文の執筆にまで「進化」、3年前に名古屋市で開催された下水道研究発表会では、中学生による初の発表という「快挙」も達成。さらに、平成28年度の『横浜環境活動賞 大賞』と『横浜環境活動賞 生物多様性特別賞』をダブル受賞。続く29年度には、『環境大臣賞 地域環境保全功労者表彰』『国土交通大臣賞(循環のみち下水道賞)』と2年連続のダブル受賞となり、その活動は広く評価されている。

さらに、学内だけにとどまらず、舞岡小学校や舞岡高校、さらには横浜市立大学の木原生物学研究所といった近隣の学校と世代を超えた連携も活発化している。舞岡川という地域の「財産」が、幼稚園から大学までの科学教育のツールとして機能しており、その契機となったのがハグロトンボの復活＝河川水質の改善ということは下水道関係者にとっても心に留めておきたい事象と言えるだろう。とりわけ、今の時代の「河」を取り巻く本質を理解する教育者が主導しているという点で意義深く、下水道関係者にとって教育関係者との連携は今後益々重要なものとなる。

(写真④から「舞岡中学科学部の生徒さんを軸に世代を超えてハグロトンボの生態を調査「翅にナンバリングして詳細な生態調査を実施」「研究成果は国土大臣賞など数々の栄誉に」)

